

「三階教」の懺悔に関する考察：懺悔の単独性

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-07-05 キーワード (Ja): キーワード (En): Three Stages School Buddhism, Sangai-kyo, Sanjie-jiao, Shingyo, Hsin-hsing, Repentance, Senzatsu-kyo, The Sutra of Divination and Observation of Wholesome and Evil Retribution, Hokke Zanmai Sengi, Lotus Samādhi Repentance Ceremony 作成者: 柳井, 重久 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1041

“Singularity of Repentance” Characteristics of Repentance in ‘Three Stages School’ Buddhism <Sangai-kyo/ Sanjie-jiao>

YANAI Shigehisa

Key words

Three Stages School Buddhism/ Sangai-kyo/ Sanjie-jiao/ Shingyo/ Hsin-hsing/ Repentance/ Senzatsu-kyo/ The Sutra of Divination and Observation of Wholesome and Evil Retribution/ Hokke Zanmai Sengi/ Lotus Samādhi Repentance Ceremony

Summary

This study is to underscore the salience of repentance in Sangai-kyo founded by Shin-gyo/ Hsin-hsing (540-594). This paper fundamentally relies on precedent studies by Teruma NISHIMOTO such as ‘Studies of Sangai-kyo’ and other theses.

To understand the characteristics of repentance in Sangai-kyo, it is necessary to comprehend its meditation practice methodology. One of the most distinguished key concepts throughout its practice is ‘Fu-kei (universal respect) & Nin-aku (recognition of the evil)’. In the school, the respect is to be directed to everyone EXCEPT ONESELF. To the contrary, the evil is to be observed ONLY WITHIN ONESELF whose capability is ranked as that of an incurable man of cognitive distortion. Also the school emphasizes the ‘ichi-nin ichigyo buppo’ (one single Buddhist practice conducted by and for oneself). ‘Singularity’ is very important concept for the school as the evil is attributed only to oneself and the repentance is to be conducted regarding the evil of oneself. As the practice is done for oneself, altruistic purpose is not advocated in this school.

Repentance seems in common with other schools of that era. Comparative overview of Senzatsu-kyo (The Sutra of Divination and Observation of Wholesome and Evil Retribution) is done to clarify salience of Sangai-kyo’s repentance. It is one of sutras which form the theoretical ground of Sangai-kyo and, according

to some current studies, related to Tendai/Tiantai doctrine as is seen in ‘Hokke Zanmai Sengi’ (Lotus Samādhi Repentance Ceremony) written by Chigi/Zhiyi (538-597).

In Senzatsu-kyo, one’s capability is ranked according to divination. Though low, one has some possibility of not being a man of distortion which is significant difference from Sangai-kyo. Both in Senzatsu-kyo and Hokke Zanmai Sengi, practice together with people seems emphasized. The former also advocates repentance practice FOR universal people while the latter seems to covert to practice simply WITH people and not necessarily FOR people. Especially Senzatsu-kyo’s practice should be recognized as contrast to Sangai-kyo in this regard.

This study focuses on the ‘singularity of repentance’. The reason arises from the attention to the assertion regarding Tathāgatarbha written by Masahiro SHIMODA. According to Shimoda, Tathāgatarbha is defined as ‘unification with Tathāgata/Buddha accompanied by incessant and irreversible delay from being the One’. Recognition of this ‘delay’ can be regarded as repentance. Therefore, it seems possible Tathāgatarbha requires incessant repentance. The issue here is where one sets the delay.

In Sangai-kyo, by the practice of Fu-kei & Nin-aku, the delay is set between oneself and everyone else, while ‘location of delay’ of Senzatsu-kyo and probably Hokke Zanmai Sengi might be ambiguous because repentance includes other people in addition to oneself.

Repentance of Sangai-kyo can provide us very clear image of Tathāgatarbha, and therefore, better understandings on it.

「三階教」の懺悔に関する考察

柳 井 重 久

「三階教」の懺悔に関する考察

——懺悔の単独性——

柳井 重久

〈キーワード〉三階教／信行／懺悔／『占察經』／『法華三昧懺儀』

1. はじめに

信行〈生年：540年（東魏の孝静帝の時代）、没年：594年とされる（隋の文帝の時代）〉¹⁾を開祖とする三階教は、度重なる弾圧を受け、「十世紀末頃まで三階教の活動が記録されている」²⁾のを最後に終焉に向かったとされている。本論述の目的は、三階教の精神の根幹を為す「懺悔」が同時代の他宗派と共通するものである、ということを示すことにある。同時に、三階教の懺悔が他の教学と比して、どのような特徴を持つのかを考察していきたい。

本論述の先行研究として、西本照真の『三階教の研究』³⁾（以下『研究』）、『『仏性観修善法』の基礎的研究』⁴⁾（以下「修善法研究」）、並びに「三階教の観法について」⁵⁾（以下「観法について」）をまず挙げておく必要がある。本論述は、この先行研究の分析を全面的に踏襲するものである。その上で、三階教が教証とする経論に見られる懺悔が三階教のそれとは相違を見せていることを示し、その相違が現代においても意味を持つものであるという主張を試みる。

2. 三階教における懺悔の位置付け

2.1. 『仏性観修善法』

三階教の懺悔を分析するためには、その観法を見ることが不可欠であ

り、「修善法研究」を要約すると以下のような内容になる。

三階教の文献として、まず観法を説く信行の著作部分と講義録とからなる『仏性観修善法』を見ると、この文献は①仏性観、②如来蔵観、③法身観の三つの観法に分けられる。①では『十輪經』『華嚴經』などの引用が認められるものの文献名は特定されていない。一方で②と③では、『法華經』『占察經』などの文献が明記されている。本論述では、このうち『占察經』、あるいは天台智顗の思想などに注目する。

『仏性観修善法』は〈“相”重視の批判〉と〈“体”重視の主張〉の二つのポイントを押さえておく必要があると思われる。この点と“体”に関する観法等が①で論じられている。さらに“体”、及び〈“相”の異なり＝“縁”〉が②で論じられ、③において〈法身の“体”と“縁”〉に収斂されていくことになる。

さて、そもそも“相”、“体”とは何か。次項で述べる『三階観法略釈』において、「観法について」によれば、“相”とは「果得満足仏」すなわち“果”＝結果である。そして、“体”とは「常因の凡仏」すなわち“因”＝原因である。〈“相”重視の批判〉とは、結果としての仏を追い求めるだけで、〈凡夫である自ら〉の根本を見つめることが疎かであることに対する批判ではないだろうか。そしてこのことは次項における「懺悔」に深く関わってくると思われる。

「修善法研究」によれば、『仏性観修善法』の部分②は、対象を明らかにする観法 (I) 「所観境界」と、心を明らかにする観法 (II) 「能観」に分けられ、(II) はさらに (i) 入観、(ii) 照性起行、(iii) 頓入一乗頓出生死に分化される。(i) 入観は「概念方便」と「善境界」の解明から成るが、前者は止観の止に、後者は止観の観に相当する。

2.2. 『三階観法略釈』における観法

「観法について」で分析されているのが、『三階観法略釈』（以下『略釈』）であり、「三階教の観法の全体像を窺うのにもっとも適した文献」とされている。成立は7世紀半ば以降とされる⁶⁾。

「観法について」によれば、『略釈』は応仏観、仏性観、菩薩行観の三段に分かれ、「仏性観の説かれた箇所分量は全体の九割以上にのぼる」。従って、仏性観にある程度考察の的を絞るのは妥当であると思われる。

先述の『仏性観修善法』においては“体”の“相”に対する重要性が説かれていたが、既に示した通り、『略釈』では“相”を「果得満足仏」（果），“体”を「常因の凡仏」（因）と見做している。これに加え、“因”から“果”に至る実践「合観」が“行”と規定されている。そして、“相”の観法が応仏観、“体”の観法が仏性観、“行”の観法が菩薩行観（普凡普聖観）となる。『略釈』の分量から見て、この文献の重点が仏性観、“体”の解明にあると考えることは妥当であろう。“体”の重視、これは『仏性観修善法』と平仄が合う。

『略釈』では、“体”の解明の終わりの箇所以後、「合観」における“行”の部分を経て、詳細な悪の体系を説く「四種悪観」「五科悪観」の節に至るが、この過程を貫く鍵概念が「懺悔」であることは強調しておかなければならない。

さて、『略釈』の中核を成す“体”において、具体的にはどのような観法が説かれているのだろうか。「観法について」の特に重要なポイントを掲げ出せば以下のようなものであるだろう。

別見観

「縁を廢して体を取り、体を見て相を見ない」「ひたすら体としての真を見る」という観法であり、『起信論』の枠組みが使用されていると「観法について」はいう。三階教観法における“体”の重視は前述の通りであるが、この点に関する『起信論』の枠組みとは何か。柏木弘雄は『起信論』の枠組みを以下のように解説する⁷⁾。



柏木によれば、「一切の世間法と出世間法は、ことごとくこの衆生心の中に包摂されている。しかも、その衆生心が体大・相大・用大の『義』を所有することがあきらかにされることによって大乘の意趣が完結する」というのが『起信論』の「理論的言表の出発点であり(略)全般的に独自の方向を与えようとする根本的立場である」。そして、「『心真如』(略)、それが『心』(=『衆生心』)の本性にたいする洞察によって導かれ得るものである」⁸⁾と説いているという。

衆生心の持つ義とは、「大乘そのものの自体と、その属性(『相』)と、その働き(『用』)」である。「衆生心の自体には、あらゆる存在のまことのすがた(『真如』)があらわになっており、それには悟りに到達せる覚者の位にあっても、あるいは迷いの生存にあっても、つねに平等」(体大)であり⁹⁾、この点は『略説』の「体としての真」(=因)に相当するだろうか。

一方、迷いの生存を含む現象界の事物事象が“果”=“相”、その異なりが“縁”ということなのではないだろうか。この“縁”は、後で述べる三階教的「遅延」の概念に極めて近いと考えている。

敬簡と摂入一乗観

ひたすら他者に八種仏法の善を見て敬うこと、「他者を如来蔵・仏性・当来仏として敬うこと」が「敬」であり、他者と区別して自己一身にのみ十二種の顛倒を見、今後犯さないようにしていくことが「簡」であり、三階教の主要な実践思想としての普敬と認悪のことであると、「観法について」は説明する。簡=認悪については、「四種悪観」「五科悪観」を貫く鍵概念、「懺悔」に関連するであろう。

また、摂入一乗観という観法があり、敬簡のうち敬と深く関わっており、「仏性という体、すなわち如来蔵が目の中の対象に遍くゆきわたっていること観ずる」観法である。この如来蔵観は、“体”を重んじる『仏性観修善法』の根幹でもある。

三階教の「体」は仏性仏を説き、その段階で既に認悪=懺悔を根本に据

えている。それに基づいて「行」という実践と、実践の中身である「懺悔」を展開していくのが『略釈』の構成であると言える。

3. 占察經の懺悔

3.1. 『占察經』の概要

三階教における如来藏思想の教証の一つ、『占察經』の思想を、篠田昌宜の論文「智旭『占察經義疏』に於ける「現前一念心」について」¹⁰⁾によって概観を見てみたい。

同經において、「一實境界」という概念が重要であり、これは「衆生の心は本来清浄で、あらゆる相対的な分別を離れており、衆生の心であっても仏の心と同じで、究竟一相であること」を意味している。そして一實境界という言葉が「『自性清浄心』『如来藏』とも言い換えられている」¹¹⁾。さらに、三階教の敬観や摂入一乘観の如来藏思想にも対応する。

『占察經』は「心は『内相』と『外相』にわかれていて、『外相』では一切諸法の種種の境界が念ずる所に従い現前する機能を司る部分。『内相』は真と妄にわけられ、衆生が外相において相対分別してしまうのは、妄の部分が分別・覚知をすることが原因」であるという¹²⁾。この部分も、『起信論』の思想にも親和性が高い。そして、妄念が“相”のあらわれかたの一つとなりがちなことについての分析は、三階教とも結びつく。

実際に、『占察經』の「下巻にみられる如来藏思想は『起信論』との関わりが証明」されとの研究があり、『占察經』と『起信論』のどちらが先に成立したのかの議論がなされている¹³⁾。三階教に『起信論』が影響していることについては既に触れたが、『占察經』は三階教の教証であると同時に、『起信論』經由でも三階教に深く関わっていると言えるだろう。

3.2. 『占察經』の懺悔

『占察經』が「懺悔・滅罪・称名という具体的な儀礼に連なっていることは、それが奇しくも同時代における中国仏教の大きな趨勢の一端であっ

た」¹⁴⁾ (下線は引用者)。『占察経』の下巻が如来蔵を説くのに対し、上巻が「『木輪』という道具を用いて過去・現在・未来三世の業報を占う方法と懺悔の行法（懺法）及び受戒の方法」を説いている¹⁵⁾。木輪相の占いには三種類あり、懺悔と深くかかわるのが、第一と第二の占いである。

第一の占い：

「能く宿世に作れる所の善惡の業種の差別を示す。其の輪は十有り。」
「若し宿世に作せる善惡の業の差別を観んと欲する者は、当に木を刻して十輪と為し、此の十輪に依って十善の名を書記すべし。一善は一輪に主在し、一面に於いて記す。次に十惡を以って、書して十善に対して相当せしむべし。亦各一面に於いて記す。十善と言へば即ち一切衆善の根本たり。能く一切諸余の善法を撰す。十惡と言へば亦一切業惡の根本たり。能く一切諸余の惡法を撰す。」¹⁶⁾

「『宿世に作す所の善惡種の差別』をみるもので、十個の木輪の各一面に殺生・偷盜・邪淫等の十惡を記し、反対の面にそれぞれ不殺生・不偷盜・不邪淫等の十善を記したものを擲げる。」¹⁷⁾

第二の占い：

「能く宿世の集業の久近と作せるところの強弱大小の差別を示す。其の輪は三有り。」¹⁸⁾「善男子、若し過去往昔の集業の久近、作せる所の強弱、大小の差別を占察せんと欲する者は、当に後、木を刻して三輪と為して身口意を以って各一輪を主り字を書して之を記すべし。又輪の正中の一面に於いて一画を書して粗長ならしめて畔に徹らしめ、次に第二面に一画を書して細短ならしめて畔に至らざらしめ、次に第三面に一傍刻の画の如くなるを作って其れをして粗深ならしめ、畔に至らざらしめ、次に第四面に亦傍刻を作って細浅ならしむべし。」¹⁹⁾

「第一の占いで出た結果を元に『過去往昔の集業の久近、作すところ

の強弱大小の差別』をみるもので、『身』『口』『意』を表す三個の木輪の各四面に長短の線を記したり刻したりしたものを擲げる」²⁰⁾。

第三の占い：

「三の輪相は、能く三世の中の受報の差別を示す。其の輪は六有り。」²¹⁾
 「善男子、若し三世の中の受報の差別を占察せんと欲せば、当に復、木を刻して六輪と為し、此の六輪に於いて、一二三、四五六、七八九、十十一十二、十三十四十五、十六十七十八等の数を以って字を書して之を記すべし。(略)是くの如きの数相は、一切衆生の六根の聚、皆如来藏、自性清浄心、一実境界より起って一実境界に依って、之を以って本と為すことを顯示す。」²²⁾

前二者の占いで「悪業の結果の出たものが、次に静処の一室で懺悔の法を修め」、(第二の占いにおいて)「『身』『口』『意』三つの木輪にて全て純善の清浄相が出るまで」懺悔を行うことになる²³⁾。第二の占いは「身口意の三業にそれぞれ対応する木輪各々の四面各面に増上善・微薄善・増上悪・微薄悪の四つを配し、その三つの木輪を投げ放つことにより占う」ものであり、従って「各輪 1/2 の確率で善相を示し、なれば全輪で善相を示す確率は 1/8」となり、増上善に限って考えてみても、その確率は 1/64 である」²⁴⁾。

ここに三階教の懺悔と重要な異同が見られるので、次項で考察する。

4. 三階教と『占察經』等の懺悔の異同

4.1. 『法華三昧懺儀』及び『占察經』にみられる「衆生と俱に為す懺悔」

上述のように、『占察經』では占いの結果自己に悪をみる「可能性が高い」。三階教では先に敬簡と摂入一乗觀の項で見たように、自己一身にのみ十二種の顛倒を見る。『略釈』では、「一向見他八種仏法」「於自身上以相収体簡、唯見十二種顛倒惡」²⁵⁾ (「一向に他者の八種仏法を見る」「自身

の上に相を以って体を収め認惡（簡）し、ただ十二種の顛倒惡を見る」と説かれている。

このように、三階教と『占察經』の類似点は認め得る。一方、『占察經』にあっては、1/8の確率で身口意に善相を示すことがあるが、三階教では自己一身はひたすら惡なのである。

懺法についても重要な相異が見られる。「『占察經』では『一切衆生と共に』という視点が強調されている」²⁶⁾ ことである。

ここでは、『占察經』及び「『占察經』の流行と時代をほぼ同じくする智顗の懺法」²⁷⁾ も交えて比較を行いたい。（智顗の懺法が『占察經』の影響を受けていると見る見解も存在する。）²⁸⁾

智顗の懺悔も、『占察經』のそれも、「いわゆる行者の個人的な罪の告白にとどまるものではなく、一切衆生と共に懺悔をなす」²⁹⁾ ことである。まず、『法華三昧懺儀』における「一切衆生と共に為す懺悔」について見てみたい³⁰⁾。

第七明懺悔六根及勸請隨喜迴向發願方法

行者既禮佛竟。即於法座前正身威儀。燒香散華存想三寶。罌塞虛空。普賢菩薩乘六牙白象。無量莊嚴眷屬圍遶。如對目前 一心一意 爲一切衆生行懺悔法。

生重慚愧發露無量劫來及至此生。與一切衆生 六根所造 一切惡業斷相續心。從於今時乃至盡未來際 終不更造一切惡業。所以者何。業性雖空果報不失。知空之人尚不作善。況復作罪。若造惡不止 悉是顛倒因緣 則受妄果。是故行者以知空故生大慚愧。燒香散華發露懺悔。下所說懺悔章句。多用普賢觀經意若欲廣知懺悔方法。讀經自見。若不能廣尋。今取意略說以成行法。

【最初懺悔眼根法】

行者一心胡跪正身威儀。燒香散華。心念改悔。我與衆生眼根 從昔已

來 性常空寂。顛倒因緣起諸重罪。流淚悲泣 口宣懺悔。下五根懺悔威儀方法。例如今說。口即自言至心懺悔。比丘某甲與一切法界衆生從無量世來 眼根因緣貪著諸色。以著色故貪愛諸塵。以愛塵故受女人身 世世生處惑著諸色。色壞我眼爲恩愛奴。故色使我經歷三界。爲此弊使盲無所見。眼根不善傷害我多。十方諸佛常在不滅 我濁惡眼障故不見。】今誦大乘方等經典。歸向普賢菩薩及一切世尊。燒香散華。說眼過罪不敢覆藏。諸佛菩薩慧眼法水願與洗除。以是因緣令我與一切衆生眼根一切重罪畢竟清淨。懺悔已禮三寶。說是語已。五體投地。普賢觀經中 明懺六根。悉須三說。若時久難行。一說亦得但作是言。第二第三亦如是說。行者當自思憶經。於此身眼根所起重罪。對普賢發露懺悔。下五根皆有此意。

懺悔耳根法

至心懺悔。比丘某甲與一切法界衆生從多劫來 耳根因緣隨逐外聲。聞妙音時心生惑著。聞惡聲時起百八種煩惱賊害。如此惡耳報得惡事。恒聞惡聲生諸攀緣。顛倒聽故當墮惡道邊地。邪見不聞正法。處處惑著無暫停時。坐此竅聲。勞我神識墜墮三塗。十方諸佛常在說法。我濁惡耳障故不聞。今始覺悟。誦持大乘功德海藏。歸向普賢菩薩及一切世尊。燒香散華。說耳過罪不敢覆藏。以是因緣令我與法界衆生耳根所起一切重罪畢竟清淨。懺悔已禮三寶。

懺悔鼻根法

至心懺悔。比丘甲與一切法界衆生。從無量劫來坐此鼻根。聞諸香氣。若男女身香肴膳之香。及種種香迷惑不了。動諸結使諸煩惱賊臥者。皆起無量罪業。因此增長。以貪香故。分別諸識處處染著。墮落生死受諸苦報。十方諸佛功德妙香充滿法界。我濁惡鼻障故不聞。今誦大乘清淨妙典。歸向普賢菩薩及一切世尊。燒香散華 說鼻過罪不敢覆藏。以是因緣令我與一切衆生鼻根一切過罪畢竟清淨。懺悔已禮三寶。

(以下、舌根法、身根法、意根法と続く)

「一切衆生」の言葉が懺悔を説く箇所頻出することが見て取れる。

懺悔眼根法は眼根の爲した悪業に関する懺悔であり、耳根以下がそれに続く。懺悔眼根法の半分ほどを訳すと次のようになる（上記の【 】内）。

【最初に懺悔眼根法

行者は一心に胡跪して身の威儀を正す。焼香散華する。心は改悔を念ずる。我と衆生の眼根は 昔このかたより 性が常に空寂であった。因縁を転倒して諸々の重罪を起こした。流涙悲泣し 口に懺悔を宣べる。以下が五根懺悔の威儀方法である。例の如く今説く。口に即ち自ら言つて至心に懺悔する。比丘である我と一切の法界衆生は 無量世のこのかたより 眼根の因縁が諸色に貪著している。色に著することをもつての故に諸塵を貪愛する。塵を愛するをもつての故に女人の身を受け 世世生処に諸色に惑著している。色は我が眼を壊して恩愛の奴となしている。故に色は我をして三界を経歴せしめている。そのためにこの弊が盲をして見るところ無さしめている。眼根の不善は我を傷害することが多い。十方の諸仏は常在にして不滅であるが 我の濁悪の眼障の故に見えない。】

この行法では、個々に独立した懺悔を皆で行うのか、他者の罪を考慮しつつ懺悔を行うのか。必ずしも断定できないかもしれないが、他者の罪まで「この私」が考慮しているのであれば、三階教の「普敬」の思想とは異なってくる。「我濁悪眼障故不見」（我の濁悪の眼障の故に見えない）は「我々」ではなく「この私」の罪障に関するものかもしれないが、その他の部分で他の衆生は何を懺悔しているのであろうか。他人の罪障と懺悔は当然視野に入っていると考えるのが自然ではないだろうか。

次に、『占察経』における「衆生と共に為す懺悔」は以下の箇所にみられる。

「善男子、懺悔の法を修せんと欲ん者は、当に静処に住すべし。」「然して後、更に別に名を称して、我地藏菩薩摩訶薩を礼せよ。是くの如く礼し応に所作の罪を説き一心に仰告すべし。『唯、願くは十方の諸の大慈尊よ、証知し護念したまへ。我れ今懺悔して復更に造らじ。願くは我れ及び一切衆生、速かに無量劫来の十惡四重、五逆顛倒、謗毀三宝の一闡提の罪を除滅することを得ん。』と。復應に思惟すべし。『是くの如き罪性は、但虚妄顛倒の心より起る。定実に而も得べき者有ること無し。本より唯空寂なり。願はくは我れ及び一切衆生、速かに心本に達して永く罪根を滅せん』と。次に應に復、勸請の願を發すべし。『願はくは十方一切の菩薩の未だ正覺を成ぜざる者をして、願はくは速かに正覺を成ぜしめん。若し已に正覺を成ぜる者は、願はくは常住に世に在って正法輪を轉じて涅槃に入らざらしめん』と。次に當に復、隨喜の願を發すべし。『願はくは我れ及び一切衆生、畢竟じて永く嫉妬の心を捨て、三世の中、一切の刹土の所有る修學、一切の功德及び成就する者に於いて悉く皆隨喜す』と。次に當に復、廻向の願を發すべし。『願はくは我が修する所の一切の功德、一切の諸の衆生等を資益し、同じく仏智に赴いて涅槃の城に至らん』と³¹⁾。

「この私」が他の衆生の罪まで考慮していることが『法華三昧懺儀』の上記の箇所と比べて明確であるように思われる。特に、最後の下線部「一切の諸の衆生等を資益し」は三階教との比較において重要である。懺悔を衆生と俱に行うだけでなく、「一切の衆生のために」行う主旨だからである。

なお先述のように、三階教では他者と區別して自己一身にのみ十二種の顛倒を見て、自己に善を認めないのであるが、『占察經』では「懺悔は『身』『口』『意』三つの木輪にて全て純善の清淨相が出るまで」懺悔を行うという期限が規定されている。自己が純善である可能性という設定自体が三階教とは異なるのは先述の通りである。それでも、『占察經』の懺悔

は『法華三昧懺儀』（大正四六・一九四一・九五四下）が「二十一日間を一定の期日として定めている」（「復次行者於三七日中修懺悔時」）のに比して懺悔の上限が長期間である。『占察經』では「罪障が軽く修行に対する意欲が強いものは七日を期日」「それより劣る者は二七日（引用者注：14日）・三七日から七七日の間を期日」「増上なる種々の罪業が過去現在にわたって有る者は百日から千日を期日」と、最大千日の期日を設けており³²⁾、『法華三昧懺儀』に比べて大幅に長期間の懺悔の上限が想定されている。しかし懺悔が『法華三昧懺儀』より長期間であったとしても、「自己の善の可能性」の有無が三階教との比較において重要であることを繰り返しておきたい。

4.2. 三階教の懺悔

如上、三階教においては罪を持つのはおのれ一人であるから、懺悔は極めて個人的単独的なものである。この点は、善導（613-681）の浄土教とも大きく異なるのである。柴田泰山によれば、「三階教ではあくまでも自己の一身における『悪』を観察し覚知することを目的とした実践行が説示されていた。しかし善導は、たとえば下輩生に至っては自らが犯した重罪の懺悔すらも不可能なことを指摘している」「一切衆生が凡夫であることを強調している」³³⁾のが善導の思想である。そこには三階教の「普敬」のような思想は見られないのであって、「悪の自己単独性」従って「懺悔の自己単独性」と大きく異なっているように見える。

「一切の衆生のために」行う『占察經』の懺悔は三階教では否定的に捉えられている。三階教の文献で信行の著したとされる『制法』を見てみたい。このうち「惡世界惡時惡衆生出世行法」（すなわち三階教の焦点である）の部分には次のようにある。

「唯得学一切自利行。一唯得一人。二唯得一行。三唯得觀一境界。四唯学一相續。五唯得一身業、不得多遊行。六唯得一口業、不得多語言。七唯得一意業、不得多覺觀。」³⁴⁾

三階教の行においては、自利に集中しているので、懺悔を他者のために行う『占察經』とは大きな違いがある。(ただし、信行撰『受八戒法』は、「願令一切衆生悉得離離苦解脫、捨邪帰正、発菩提心、永除三障、常見一切諸仏菩薩及善知識、恒聞正法、福智具足、一時作仏」³⁵⁾ という他者の離苦などを願う文で締め括られている。)

また、この部分は同じく信行の『対根起行法』で「一人一行仏法」と呼ばれているものに対応する。

「六者、一人一行仏法、一人者、自身唯是悪人。一行者、如『法華經』説、常不輕菩薩唯行一行、於自身已外、唯有敬如来藏仏性当来仏仏想仏等、故名一行。」³⁶⁾

なお、『受八戒法』に示された懺悔法においては、『占察經』や『法華三昧懺儀』に見られた期限の定めは特段明記されていないと思われる。

5. 懺悔という「運動」

本論述では、三階教の「懺悔の単独性」に着目しており、それが他の宗派に比して顕著であることをこれまで述べてきた。それでは、それが三階教の特色であるとして、どのような意味を持つのか。また、自分一人が悪であり続けるならば、三階教の行は「この私」に何の価値があるのか。そこに救いがないなら、「この私のこの生」において意味を持たないのではないか、という疑問が生じるかもしれない。

三階教の「ひとえにこの私一人」の持つ「悪の認識」は、他の宗派を含めた如来藏思想を理解する上でも有効である。この罪悪感（その自覚の表現が懺悔であろう）は、下田正弘が如来藏の本質を説く際の「遅延」という概念に極めて近いと思われる。そして、その「遅延」は無限の運動を生む原動力となり得るのである。この「無限の運動」こそが、三階教の「懺

悔の単独性」に意味を与えるのではないか。この点を以下で考察する。

下田は如来蔵について、「仏の視座から、仏の宣言として」なされる「不可逆的」な³⁷⁾「衆生と如来の無区別性」³⁸⁾であり、衆生が「如来であることからの絶えざる遅延」であることによって「如来蔵思想が成立する」³⁹⁾という。このいささか難解な表現を哲学者・入不二基義の〈相対主義哲学〉における、〈地平線に向かって進むこと〉の比喩を活用し理解してみたい。

我々は、いくら進んでも「『地平線』の向こう側に立つことは決してなく」、かつ「『地平線』の向こう側であるかのように見える『彼ら』のところも、結局は『地平線』のこちら側」として、〈私たち〉に包含されていく。即ち、「『私たち』は地平線に相当」する「遂行的な存在」⁴⁰⁾である。地平線を目指す〈運動体〉である限り、地平線という到達不能で非実体的な〈仏の視座〉からの〈絶えざる遅延〉という形で、〈地平線の如きもの〉、〈如来蔵〉たる衆生が現れてくる。

この〈如来蔵という遅延〉は、たとえばヒンズー思想に見られる遅延概念と比較すると差異が明瞭になる。ウパニシャッドの一つ『チャンドーギヤ・ウパニシャッド』第十四節に遅延が説かれている。「だれかが彼の眼かくしを解きほぐして『ガンダーラ地方はこの方向だ、こちらへ行きなさい』といえ、彼は村から村へとたずねながら、(道を) 学び知り、洞察力もついて、まさしくガンダーラ地方に到達するであろう。それと同じように、この世において、師匠をもつ人は、(有に到達する道を) 知るのである。(無知の眼かくしから) 解き放たれるまでは、彼には(正しい方向に歩みだすことに) 遅延があるが、やがて(有に) 到達するのである。」⁴¹⁾(傍点引用者) とある。この場合、目的地が「有」であって、ガンダーラ地方という特定可能、到達可能な場所である。

下田の考える如来蔵とは「絶えざる遅延」という運動であり、その運動の継続においてのみ「この私」は地平線と一体化する。だが地平線は特定不可能(「私」のしている地平線とシベリアから見た地平線は異なり、厳密には「私」の隣に立つ人のしている地平線とも異なる。そして「私」の

前進によって地平線は見え方を変える)、かつ到達不可能なものである。問題は「その遅延をどこに見出すか」にある。

末尾の【図】では、浄土思想、三階教、天台思想／『占察經』思想、プラトニズムの遅延の場の図示を試みた。天台思想もしくは『占察經』の思想では、懺悔は共に行われるものであって、「この私」が本来清浄たる「如来蔵」の中に埋没してしまうのではないか。このことによって、天台思想が「総合統一のあまり、現実の有限・相対性が見失われ、観念的一元論におちいる」可能性を孕んでおり⁴²⁾、天台思想において「生成力動性が影うすきものとなった」ことに繋がっていると考える⁴³⁾。

これに対し、三階教は懺悔とは「この私」の行為であり、それは自分以外全ての衆生に対する「遅延」の意識に基づいている。これは、先に述べた三階教の別見観における“縁”の概念と共通項を持つ。善導浄土教では、この世界の一切衆生の凡夫性が説かれていることは前に触れた。遅延の場所は浄土との間に存在するであろう。【図】におけるプラトニズムは、ジャック・デリダの解釈による。それによれば、「古代ギリシャの都市国家とくにアテナイで（略）旱魃、飢饉、疫病、その他のカタストロフがポリスを襲ったとき、ポリスを浄化し、その厄災を鎮めるための治療薬（パルマコン）として（略）計二名の男（引用者注：パルマコスと呼ばれる）を神に捧げる」という儀式、「古代ギリシャのホロコースト」がその本質であるとする。そして「パルマコスが悪として、外部として決定」されたものは、「無用のものとして必要とされ」それによって内部である「ポリスを保全する」⁴⁴⁾。即ち、プラトニズムとは、外部に悪を設定し、それによって内部の市民／衆生の自我を確立するという「内部維持のメカニズム」なのであり、その西欧的あり方がデリダによって批判されているのである。この批判に応えるものが、悪を自らに設定する三階教や浄土教なのではないだろうか。

6. 三階教の懺悔の今日的意味

デリダは「どんな人も『私は正しい』『私は正義である』ということとはできない」⁴⁵⁾という。なぜなら「他の他者を犠牲にせずには一人の他者にさえ責任をとれない」⁴⁶⁾というアポリアがあるためで、反面そのアポリアが無いような責任は「プログラムの適用」にすぎず、「無責任に近づく」ことになる⁴⁷⁾からである。他者を犠牲にしているという自責の反復により、正義そのものでなかったとしても、『際限なく正義のほうへ向かっていく』⁴⁸⁾行為が、デリダ哲学のいわゆる〈脱構築〉であり、それは自己の悪を認識しつつ、無限に懺悔という運動を反復する三階教の、今日的表現なのではないかと考えている。

それではデリダの思想において三階教の如き「懺悔の単独性」は見られるだろうか。それはデリダがエマニュエル・レヴィナスの思想を引用するなかで意識されている。デリダはレヴィナスの思想に「〈あなた〉(Vous)の権威ある高さ」という前提に基づく「他人の不可視の超越であるような〈彼〉の哲学」⁴⁹⁾という「普敬」にも似た思想を認めており、それはおそらくデリダの思想に近いのであろう。レヴィナス自身の言葉では、(他者に対する私の)「可傷性」を自覚し「悔恨における自己告発」⁵⁰⁾を行うことにより、「他人に対する責任と化すこと」⁵¹⁾が主張されている。「責任」というものは、三階教の自利優先の部分とは反するように見えるものの、「『罪深い』とは『責任』のことにほかならず、私は世界の中のほかの誰よりも重い『責任』を一人で担っている」⁵²⁾というレヴィナスの思想解釈もあり、であればこれは「認悪」の思想とも共通する部分が認められると言えるだろう。デリダの言うように責任の遂行とは所詮正義ではあり得ない不正義であり、それにもかかわらず(それだからこそ)それを継続遂行しなければならないのである。

三階教の思想が今日に持ち得る意味として、強調しておきたいのが上記のデリダ等の思想との親和性である。すなわち、正義というものがその正

義によって見棄てられ排除されるものを不可避免的に生んでしまう非正義であらざるを得ないという自覚（懺悔、認悪）、それにもかかわらず排除されたものにも目を注ぎ（普敬）、為すべきことを継続しなければならないという、デリダの「反ホロコースト」に通じる思想なのである。

7. まとめ

三階教の懺悔は、その行法／観法の根幹を為す。懺悔は三階教団の活躍していた時代において、他の宗派とも共通する行法であるが、三階教においては「普敬」「認悪」がその特徴的な鍵概念である。自分以外の全てに善を認め、自己一身に悪を見るこの観法は、「一人一行仏法」の教義と併せ、「悪の自己単独性」「懺悔の自己単独性」という三階教の一大特徴を際立たせる。

天台教学や『占察經』の定める懺悔は、衆生と共になす、あるいは他者の救済をも目指す懺悔であり、三階教に見られるような単独性の要素はやや希薄であるように思われる。また、他者も含めたこの世界全てが悪であるとする善導浄土教も、三階教の単独性とは大きな違いを見せている。懺悔は、それが「遅延の自覚と反復である」という点で一つの無限の運動になり得る。三階教はその運動性において、特徴的な遅延の設定の故に、天台思想等に比べて強烈な「動性」を持っているものと考ええる。

三階教の「不敬」「認悪」における懺悔は、デリダが目指した「脱構築」「反ホロコースト」にも通じる、極めて今日的な意義を持つものと確信している。

註

- 1) 西本照真『三階教の研究』春秋社、1998年、pp.40-41
- 2) 同、p137
- 3) 同、全体
- 4) 西本照真「『仏性観修善法』の基礎的研究」『木村清孝博士還暦記念論集 東ア

ジア仏教—その成立と展開』春秋社、2002 年

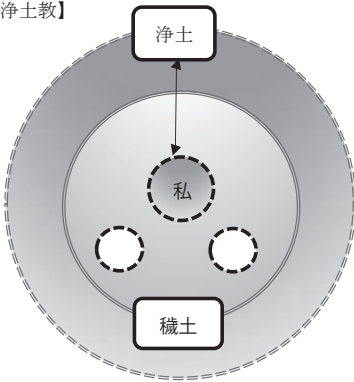
- 5) 同「三階教の観法について」『大倉山論集第四十四輯』大蔵精神文化研究所、1999 年
- 6) 西本 1998 年、前掲書、p.227
- 7) 柏木弘雄『大乘起信論の研究』春秋社、1981 年、pp.434-435
- 8) 同、p.353
- 9) 同、p.431
- 10) 篠田昌宜「智旭『占察經義疏』に於ける「現前一念心」について」『駒沢大学仏教学部論集 (34)』駒沢大学佛教学部、2003 年、pp.279-290
- 11) 同、p.279
- 12) 同、p.280
- 13) 同、pp.280-281
- 14) 柏木、前掲書、p.207
- 15) 池平紀子「『占察善惡業報經』の成立と伝播について」吉川忠夫編『唐代の宗教』朋友書店、2000 年、p.355
- 16) 岩野真雄編『国訳一切經印度撰述部 經集部 十五』大東出版社、1932 年、p.321
- 17) 池平、前掲論文、p.359
- 18) 岩野編、前掲書、p.321
- 19) 同、p.323
- 20) 池平、前掲論文、p.359-360
- 21) 岩野編、前掲書、p.321
- 22) 同、p.329
- 23) 池平、前掲論文、p.360
- 24) 遠藤純一郎『占察善惡業報經』と智顗の懺法』『智山学報通号 63』智山勧学会、2000 年、p.110
- 25) 西本 1998、前掲書内『三階仏法略釈』より、p.633
- 26) 遠藤、前掲論文、p.106
- 27) 同、p.96
- 28) 同、pp.117-118
- 29) 同、p.102
- 30) 「大正新脩大藏經」T1941_46.0952a27-c16
- 31) 岩野編、前掲書、pp.325-326
- 32) 遠藤、前掲論文、p.109
- 33) 柴田泰山『善導教学の研究 第二卷』山喜房佛書林、2014 年、pp.90-91
- 34) 西本 1998、前掲書内『制法』より、p.580

- 35) 同、『受八戒法』より、p.600
- 36) 同、『対根起行法』より、p.494
- 37) 下田正弘「第一章 如来蔵・仏性思想のあらたな理解に向けて」高崎直道監修『シリーズ大乘仏教第八巻 如来蔵と仏性』春秋社、2014年、p.27
- 38) 同、p.30
- 39) 同、p.44
- 40) 入不二基義『相対主義の極北』ちくま学芸文庫、2009年、p.206
- 41) 長尾雅人編集『世界の名著Ⅰ パラモン経典 原始仏典』「輪廻 チャーンドーギヤ・ウパニシャッド 第五章（抄）」中央公論社、1969年、p.122
- 42) 田村芳朗・梅原猛『絶対の真理〈天台〉』角川ソフィア文庫、1996年、p.49
- 43) 同、p.41
- 44) 高橋哲哉『デリダ 脱構築と正義』講談社学術文庫、2015年、pp.115-116
- 45) 同、p.223
- 46) 同、p.245
- 47) 同、p.216
- 48) 同、p.246
- 49) ジャック・デリダ／合田正人・谷口博史訳「暴力と形而上学」『エクリチュールと差異』法政大学出版局、p.206
- 50) エマニュエル・レヴィナス／合田正人訳『存在の彼方へ』講談社学術文庫、1999年、p.288
- 51) 同、p.276
- 52) 斎藤慶典『レヴィナス 無起源からの思考』講談社選書メチエ、2005年、p.196

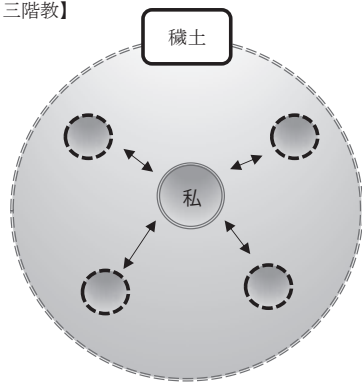
(武蔵野大学大学院博士後期課程)

(56)

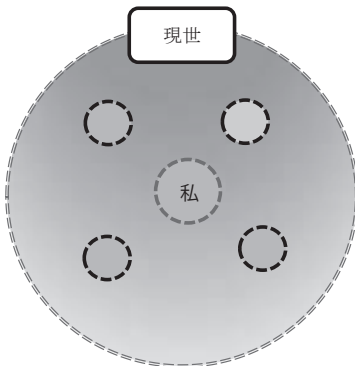
【a. 浄土教】



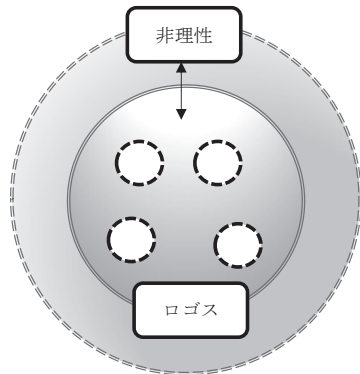
【b. 三階教】



【c. 天台/『占察経』】



【d. プラトニズム (デリダの解釈)】



【図】